
異世界の中心に立ったとき

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の中心に立ったとき

【Nコード】

N1281Q

【作者名】

翔

【あらすじ】

いつもと変わらない、日常を過ごしていた、佐藤塔矢。しかし、ある1日が全てを変えた。そして、歯車が狂い始める。あなたは、突拍子も無いことを信じることができますか？

序章 いつもと変わらない日々(前書き)

まだはじめたばかりですが、何かあったらコメントお願いします

序章 　　いつもと変わらない日々

暗い部屋に少年が一人、夏のものすごい熱気でベッドの上で唸っている。

カーテンは舞い上がることも無く、外の光も入ってこない。寝る前に窓を開けるのを忘れていたらしく、どこかにある昼間の砂漠と化していた。

さつきまで、暗かった部屋に一つの長方形をした光が輝きだす。その光は周りを照らし、自分がベッドの置きスペースに置かれている携帯電話だということを示しているようだった。そのあとに、光を放っている携帯電話から目覚し時計のアラームが鳴り響いた。

それに気付いた少年は手を伸ばし、携帯電話を探し始めた。手はとどいているはずだが、本体を見ていないためどこにあるのか分からないでいた。

あちこち手を伸ばしながらも、携帯電話を掴み取り、顔に近づけ指で目を擦りながらじっと画面を見つめると、デジタルで六時三十分指していた。

それを見た少年は、手でぼさぼさの頭を掻きながらゆっくりベッドから体を起こした。

額にはかなり汗を浮かべていて、髪自体にも水分がすっかりと染み込んでいる。

一つ、大きな口を開け、あくびをしながらベッドを降りた少年は、正方形の部屋に一つしかない窓へと歩いていく。

まず、カーテンに手を伸ばすと、勢いよくその場にあるものを退けるように動かした。それとともに、レールが動く音が密封された部屋に、大きく響く。

さつきまで暗かった部屋に、日の光がいつきに流れ込む。暗かつ

た部屋がいきなり明るくなったせいか、少年は腕で顔を隠した。そんなこともすぐになれ、次に窓の鍵を外し、窓を開けると少しだが、風が少年に程よく当たり、水分をしっかりと染み込んだ髪がなびいている。

「はあ、涼しいな。」

少年は一言呟いた。

そのあと、シンプルな学習机に置かれたバツクに手を伸ばし、その隣にある本棚から教科書をどんどん詰め込み、チャックをゆつくり閉めた。

壁にかけられたシワだらけの制服を、ハンガーから外したあと床に置き、着替え始めた。

着替える動作は遅く、まだなんども、目を閉じたり開いたりする動作を何度も繰り返している。

ようやく、数分かかって着替え終わり、机の置かれたバツクを手で掴み、部屋を出ようとしたとき、制服から名刺サイズのカードが落ちる。

そのカードには、『生徒証明書』と明記されていて、名前の欄には『佐藤 塔矢』、学校名には『新東京都 第一中学校』、学年には『三年』、と書かれている。

それをつかさず拾った佐藤塔矢は、ドアノブに手を伸ばし部屋を後にした。

部屋を出ると、廊下が左右に広がっており、左に一つ、右に二つ部屋がある。

左にある部屋を一つ通り過ぎたところに階段があり、塔矢は半分寝ている寝ている足で一段、一段ゆっくり降りて行った。

降りた先にはリビングがあり、塔矢の母の趣味でかなりの洋風に仕上がっている。花柄のじゅうたんや花柄のカーテン、白く見えるがまたもや花柄の花瓶。

塔矢の母は、洋風の花の印象が大きいらしく、リビングが全世界から花を集めたような一つのお花と化していて、

今にも花粉が、部屋の空気中に浮かんでいるかのようだった。

花柄の木彫りが沢山ついている棚の前に立った塔矢は、戸を開け、食パンを取り出した。その食パンを潰れてしまいそうな勢いでテーブルに置いた塔矢は、冷蔵庫に入っていた牛乳をコップに注いだあと、一緒に胃の中へ流し込んだ。

「何だこの花畑みたいな部屋は・・・こんなんじゃ、友達も呼べやしないじゃないかよ。」

愚痴を言っている塔矢だったが、この部屋、この家自体1人の少年しかいなかった。

塔矢の母というのは、大手会社の社長で茶髪のロングヘアーが目立つ、キャリアウーマンだ。何かしら、いろんなことで忙しいらしく、いつも塔矢が朝、起きている頃にはいつもいなくなっていた。そして、夜も遅く時々出張や、外国への会議に行ったりして、塔矢は最近、会話というものをしていなかった。

じゃあ逆に父のほうはということになるが、塔矢の父は母とあまりうまくいかなかった。塔矢が小学5年のときにいなくなっていた。牛乳の入ったコップを、キッチンの流し台に置いたとき、近くにある1つの紙に気がつき、目を通すと、

『三日間、アメリカのほうに行くので、家には帰ってきません。』

母より、

ご飯は残ったもので済ませてください。
と書かれていた。

塔矢は、いつもいなくせのよ、と言いながら手で丸め、花柄のゴミ箱に投げ捨てた。

塔矢がため息を一つつくと、それと同時に玄関からチャイムが一つ鳴り響く。それを聞いた塔矢は、急いで玄関に走り、ドアをゆっくりと開けた。

そこにはいつもと変わらない日の光が、塔矢を包み込み、いつもと変わらない、七月 十五日 金曜日が始まった。

行間1（前書き）

なんでもいい 何か一言だけでも感想をください

行間 1

佐藤塔矢が密封された部屋で唸りながら寝ていたとき、家から離れた場所で一つの動く影が塀へと映し出されていた。

何かがいる場所にはすでに、車も通ってはならず、人が歩いているような気配もない。

影の持ち主は、電柱に二つ一つ取り付けられているライトのよって、映し出された。

それは、十歳を超えたぐらいの、小柄な女の子で髪は茶髪で長く、何かから逃げるように走っていた。

走っている道は大型車が一台やっと、通れるほどの幅で、周りには一軒家が密集している。

女の子のひたいからは汗が流れ、足はがたがたに震えており、何度か後ろを確認して、何以下を警戒しているみたいであった。後ろには何もけいを感じないと思ったのか、一番近くにあった電柱に体を預けるようにして座った。それと同時に、力は抜け道に寝そべった。かなりの時間、逃げていたからか、服はどこどころ切れ、靴底はかなり削れすり減っている。少し道に横になっていたが、上半身を起こし、夜の住宅街へと一度、深呼吸をした。震える肩の力を抜き、震える足を叩きながら電柱に力を借り、立ち上がる。

「はあ．．．．．はあ．．．．．逃げないと．．．
．あれから逃げないと、はあ、はあ、もつと遠くへ、見つからない場所へ。」

女の子は、後ろをもう一度確認すると、何かを感じたのか、重い足を夜の道へ一歩、歩き出し始めた。少しずつテンポを上げると、休む前とあまり変わらない速さでまた走り出す。進む道は、人があ

まり通ることのない塀と塀の間に作られた道を進んでいく。まるで、相手を翻弄させ時間稼ぎをするかのよう。

後ろには誰もいなかったはずだった。女の子が確認したときは肉眼で見ることのできない場所にいたのだから。

女の子を追うものは、道には立っておらず、電柱の後ろに隠れていたわけでもない。しかし、後ろにはいた。そこは、地面の下にあり、そこには一人の女が立っていた。その女は、現代の人があまり好んで着ない真っ黒のドレスで身を包んでいる。顔はまだ幼さが残っており、まだ二十歳前後ぐらいの年だ。

無表情だった女の顔は、少しずつ口元が上がっていき笑っている表情をつくり出す。

「みつけた。あんまり手間かけさせないでね。私たちの大切な人材なんだから。そんなに走っていると体力無くなって、命削ってるのと一緒にだよ。そんなことされるとこっちが困るんだけど・・・まあ、いいか見つけたんだし。早くこっちにおいで、新世界の要。」

その女は、下水道の中を移動しながらちやくちやくと、体力が残り少ない少女を追い詰めて行った。

行間1(後書き)

ありがとね また続き読んでね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1281q/>

異世界の中心に立ったとき

2011年1月16日09時04分発行